

「例えば今、アメリカは黒人が大統領になつてゐるんですよ。黒人の血を引くね。これは奴隷ですよ。はつきり言つて」「まさかアメリカの建国、或いは当初の時代に、黒人・奴隷がアメリカの大統領になるなんて考えもしない」

些が旧聞に属すると思われるかも知れませんが、これは2月17日、参議院憲法審査会に於ける丸山和也議員の発言。「二院制」をテーマに今回は開催され、「良識の府」を任じる参議院に「党議拘束」は馴染むか否か、の議論の最中に飛び出した暴言です。

各媒体は一斉に問題視。然しもの「産経新聞」も、「米国は黒人、奴隷が大統領」自民・丸山法務部会長 参院憲法審査会で発言」と見出しを打ち、「人種差別的な発言と取られる可能性も」と批判的に報じています。

が、「奴隷」「黒人」の言葉狩り以前に、「事実誤認」発言です。言わずもがな、第44代大統領を務めるバラク・フセイン・オバマ2

連載  
第18回

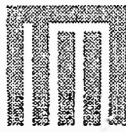
# ささやかだけど、 たしかなこと。

田中康夫

You are the Hope for Tomorrow.

## 自主憲法制定論者に侵入する 「売国奴」「非国民」ウイルスとは？

レイアウト——宗利洋—デザイン



世はアフリカ系として初の大統領ではありますが、父親はケニアからの留学生で、後に人類学者となるカンザス州生まれの母親は欧州系の「白人」なのですから。

加えて、イスラム教徒として生まれるも改宗してキリスト教の学校で学び、留学先のハワイ大学で知り合った相手と3年で離婚した父親は、東アフリカ諸国の若者を対象にケネディ家が創設した奨学金の受給者280人の1人。選ばれし人物です。

にも拘らず、日本の法務省入省後の1970年に司法試験に合格し、ワシントン州立ワシントン大学ロースクールで学んだ経歴を有する御仁は、アメリカ合衆国に「強制連行」された奴隷の末裔が現大統領と妄言するが如き「歴史認識」の持ち主だったので。同じくハワイ大学出身の櫻井よしこ女史を始めとする諸姉諸兄は、「歴史修正主義者」の風上にも置けぬ輩だと糾弾すべきでしょう。而してそれ以上に驚愕すべきは、質疑の冒頭で開陳した内容。

「日本がですよ、アメリカの第51番目の州になるということについてですね、憲法上どのような問題があるのか、ないのか」「そうするとですね、集団的自衛権、安保条約は全く問題になりません」「今は拉致問題というのがありますけれど、拉致問題すら恐らく起こっていないでしょう」

嗚呼、言葉で勝負する筈の弁護士という生業を、言霊の幸ふ国で営んできた御仁は、国民の生命と財産を護る能力無き行政府だったが故に拉致問題の悲劇が生じた、と断じたのです。のみならず、71年前の敗戦時にGHQ連合国軍最高司令官総司令部の占領政策受け入れに留まらず、「琉球処分」ならぬ「JAPAN処分」を日本国政府は自ら申し出るべきだった、と「自虐史観」も披瀝したのです。

すけれど、日本も幾つかの州に分かれるとすると、十数人の上院議員も出来る。「世界の中の日本」というけれど、要するに日本州の出身が米国の大統領になる可能性が出てくる。「まあ日本とはその時は言わないですけれども、あり得るという事なんです」

大統領予備選挙には参加可能なるも本選挙への参加資格は有さぬ準州扱いのプエルトリコ、グアム等とは違う待遇が日本州の黄色人種には特別に付与されると思われ、お花畑、なオツムの中身も然る事作ら、日本国消滅を前提とした質問を憲法審査会で行う「売国奴」「非国民」「ウイルスが」「自主憲法」制定を党是に掲げる政党に侵入していたとは！

女性問題が指弾されて議員辞職に追い込まれた若者よりも、政権与党にとつては遙かに深刻な事態。近時は弱腰な各媒体も、言葉狩りの第一報に続いて彼の首、を取りに行くに違いないと僕は予測していました。なのに、



その気配は一向に見られず、沙汰済みです。

訝っている内にふと、「文学関係者、あるいは『文学が好き』と『なんとなく』思い込んでいる読者たちの怒りを買った」と高橋源一郎氏が文庫本解説で指摘した1980年の処女作『なんとなく、クリスタル』が韓国では4社から翻訳の海賊版が出版されたのを手掛かりとして、加藤典洋氏が1985年に評論集『アメリカの影』で絵解きした分析の鋭さを思い出しました。再録します。

「日本文壇(?)」は、日本はいまアメリカなしにはやっていけないという思いをいちはん深いところに隠しているが、それを、アメリカなしでもやっていける、という身ぶりで隠蔽している。アメリカなしでもやっていける、という身ぶりが身ぶりではないのは、彼らが貧乏を恐れている(一)からである。『アメリカ』なしでやる場合、彼らは経済的困窮を覚悟しなければならないが、いまよりも生活程度が下がることを

恐れる彼らの本音が、『なんとなく、クリスタル』にあらわに現れていればこそ、彼らはこの作品に生理的な反応を生じているのである。「文学もまた、1960年以降の高度経済成長の恩恵をこうむってきた。そのタブーに似た事実のただなかから、一つの小説が書かれた時、それは現今の日本文学の恥部に触れ、何よりも、戦後の『日本文学』が『恥部』をもっているということを知らせたのである」

「3・11」以降は法治国家が放棄国家、砲血国家へと変容しても、民度が「眠度」となった呆痴国家の構成員たる大半の国民は惰眠を貪るのか、と舞台の下手で拳を振り上げる向き。自主憲法制定とは真逆のベクトルを唯唯諾諾と受け入れる自身を恬として恥じず、舞台の上手に声高に集う向き。31年前の加藤氏の慧眼、更には鬼籍に入った渡辺淳一氏の造語を拝借すれば、改憲・加憲・護憲と喧しき日本国の、その何れもが実は「鈍感力」を発揮し、故に丸山氏の2番目の妄言は無罪放免状態なのでしよう。